新年号特集

子どもたちの多様性、人権が保障される学校、社会を

今回は、不登校やメンタル不全、自傷行為、自死にもつながるなど、子どもの生きづらさの要因の1つとなり、学校や社会での対応、環境づくりが求められている性の多様性をとりあげます。子どものいのちと人権を守る学校や都教組等でのとりくみにつながればと、遠藤まめたさんと組合員との懇談会を開きました。

（懇談会は昨年 11 月末に都教組会議室にて開催）

子どもが安心して過ごし話せる環境づくりこそ

［右］横山美佳さん（小学校養護教員、女性部長）
［中央］佐々木知花さん（中学校体育教員、青年部事務局長）
［左］白根里美さん（小学校特別支援教室教員、青年部長）

違和感は幼児期から

横山　小学校では自認する事自体難しいのではないでしょうか。遠藤さんが違和感をもち始めたのはいつからですか。

遠藤　トランスジェンダーの8、9割は小学校高学年までに違和感をもち、性別については2、3歳で主張し始めます。自分は保育園、幼稚園の頃から違和感がありました。遊戯会で演劇をやったのですが、やりたいものは男の子向けだったのでできませんでした。他の子はできるのに、なぜ自分はできないのだろうと思っていました。

尊厳を守ることは低年齢から

小学生でも苦しんでいる子はいます。「男（女）らしくない」といじめを受ける事例もあります。低年齢でもその人の尊厳が守られるようにしていくことが必要です。

小1の頃から避難訓練で使う防災頭巾が恥ずかしくて被れませんでした。1年で遠足の作文を書く時も「わたし」と書く気になれず作文を出さなかった記憶があります。母が女の子の服を着せようとしてはずかしかった。終業式などで着せられそうになった時、ランドセルにズボンを詰め、学校の玄関で着替えて登校したこともありました。

高学年では男子の友だちが多かったですね。運動会の二人三脚を気の合う男の子とやったら「つきあっている」とからかわれました。自分ではそういうつもりではありませんでした。自分の振る舞いと周りの評価にギャップを感じていました。修学旅行の部屋割りで、先生は冗談で言ったのだと思いますが「男女一緒がいい人」ときいたのでさっきの男の子に手をあげたらクラスで二人だけで気まずくなりました。お風呂もみんなとは入れず。家族も先生も、そしてその時の自分もトランスジェンダーなどの言葉は知りませんでした。

なぜこんなに間違っているんだと活動へ

中学、高校と体が成長していくことを気持ち悪いと感じていました。女子校に進学し制服に対する違和感が膨れ上がりました。遠足のバスに乗る時など、女の子しかいなくて気が遠くなるようでした。

高2の時、パソコンで調べ、性の多様性、トランスジェンダーという言葉と出会いました。自分以外にも同じような人がいることがわかりました。先生から「若いから悩んでいる」「後から女の子っぽくなった子もいる」と言われ、なかなか通じないと思いました。どうしてこんなに生きづらいのだろうと感じていました。

高校を卒業する18歳の時、もっと世の中がよくなれば、という思いで活動を始めました。世の中に対する憤り、なぜこんなにも間違っているのだろう、と思ったことが活動を始めた動機です。

安心して行ける居場所として

2016年に「にじーず」を立ち上げました。10代で自覚し悩む人が多いこと、自分の友人の5人を自死で亡くしていることもありました。若い世代が自分と同じような人に出会ってみたい時、安心して行ける所がありませんでした。性的に悪い意図をもって10代に近づく人たちがいたので、安心できる場をつくるために都内で「にじーず」の活動を始めました。

今、札幌から岡山まで全国10カ所あり、これまで3500人、中学から大学くらいの子どもや若者を中心に利用しています。知らない場所に行くのが怖いという気持ちもありますが、ここに来れば自分のことをわかってくれる人がいるという気持ちもあって何とかやってきます。

活動は学校の放課後や休み時間のような雰囲気です。図書館併設などの公共施設を借りています。自習やバスケットボール、調理など、やってみたいことを調整できる施設を利用しています。

自分と同じだと感じるだけで救われる

佐々木　自分と同じだと感じるだけでも救いとなる子が多いのでしょうか。

遠藤　アンケートでは、そこに人がいるのを見ただけで自分だけじゃないと思って安心したと。この部屋にいる人は自分のことを否定しないだろうという確信がうれしいようです。辛いことがあっても安心して「にじーず」の人に話せば何とかなるから深く悩まないでいいという感想もありました。

仕方がないことではない、と気づいて

佐々木　どんなきっかけで「にじーず」とつながるのでしょうか。

遠藤　インターネットで調べてくる子が多いのですが、最近は学校の先生の紹介で来る子もいます。「にじーず」で別の子の話を聞くうちに「ちゃんづけをやめてください」と先生に言った子がいたり、先生に話したら一人で着替えることができたりした子の話をきいて、仕方ないと思っていたことが実は仕方ないことではないと気づいた、という感想もありました。

性の多様性にかかわる子どもや教職員の認識や実態

高瀬　先日、「○○らしさ」にとらわれずみんなが自由に生きていける社会について授業をしました。その中で「男が男を好きなのは普通」と話す子がいてハッとさせられました。中学生の意識は変わってきている。ただ、性別の思い込みはないと言う子たちに、保育士とシェフの夫婦の話をすると、保育士が母でシェフが父だと決めつけている子が多くいました。世の中の理解がすすんだり変わったりするといいなと思うところはどんなところですか。

染みついた「当たり前」を問い直す

遠藤　染みついている「当たり前」を問い直さないと生きづらい人は生きづらいままです。中学生に性の多様性の話をしようとすると、もう知っている、と反発してくる子がいます。自分の中にある差別の気持ちが出てくるのが怖いとか、友だちの経験していることと、自分などマジョリティの経験していることが違うと突きけられたくない、みんな同じだと思っていたいのだと思います。

カミングアウトする子どもがいたときに、差別はないから大丈夫、と言いながら勝手にアウティング（他者に暴露する）してしまった子がいました。上の世代に比べてフラットな受け止めは多いと思います。ただ、異性愛中心主義、男と女がつきあうのが当たり前、それ以外は一時的あるいは不自然とみなしてそれを下に見る考え方、それが今の社会で当たり前になり自分の中にとり入れてしまっていることに気づいていません。異性愛中心主義を知り異性が好きとは限らないというアンテナを立てていないと、同性愛の人たちが自分のことを言い出せない事態は変わらないのではないでしょうか。

遠藤まめたさん

1987年埼玉県生まれ。トランスジェンダー当事者としての体験をきっかけにLGBTの子ども・若者支援にかかわる。著書に『先生と親のためのLGBTガイド～もしあなたがカミングアウトされたなら』（合同出版）、『教師だから知っておきたいLGBT入門～すべての子どもたちの味方になるために』（ほんの森出版社）など。

学校でのとりくみや課題

高瀬　養護教員部の学習会でまめたさんにお話を伺い、性の多様性についてそれまで以上に意識するようになり、気づくことが増えました。年に何度かカジュアルウィークという試みをしていて、多くの子がジャージを着てくるようになりました。英検で性別に○をつける欄があり「書かなくちゃダメですか」と聞く生徒に「書かなくてもいいよ」と答えました。朝礼などに男女別で並ぶのも含め、まだまだ慣習にとらわれていることが多いと感じます。

尾崎　以前まめたさんのお話を伺ってから図書室に関係ある本を入れてもらいました。4月から服を脱ぐ以外のものは男女混合の名前順で健康診断を行っています。変更した理由を子どもたちに伝えるときに「男の子、女の子と言うとつらかったりもやもやしたりする子がいるんだよ」と話しました。子どもたちはすんなり受け止めていました。この後、どうやってとりくんでいこうかなと思っています。

横山　何となく学校に来られない子がいます。もしかしたら性自認等のもやもやで悩んで来られないのかもしれないなど、さまざまな背景を考慮し、大人側が人権感覚を更新して、日頃発する言葉一つひとつを選んで話していかなくては思うと、なかなか難しいなと感じます。

白根　女子で「俺」や「ぼく」と言う子がいます。多目的トイレを利用する子もいます。その子を

［右］尾崎奈々さん（小学校養護教員）
［左］高瀬久乃さん（中学校養護教員、養護教員部長）

まるごと受け止めるということを学校では大切にしています。性への興味が強い子もいます。人権としての性教育は早急にとりくまなければならない課題ですがどうしたらよいでしょうか。

佐々木　3年前、LGBTQの講演を行ってほしいと子どもたちに言われ、中3を対象に実施しました。講師はトランスジェンダーとゲイの当事者です。「LGBTQというくくりは嫌だ、ひとりの人として自由に生きていける社会をめざしている」という講師の言葉が子どもたちに響いていました。今度は全校生徒を対象に行う予定です。今、質問を集めていますが、日本では同性婚は認められず同性パートナーは認められてきているが今後どうなっていったらよいのかなど、子どもたちの知識が豊富になっているように思います。

心と体を大切にすることから

遠藤　インターネットをよく使う子どもがよく知っているのでは。LGBTについて単に教えるのではなく、まずは誰もが自分らしさを尊重されることが大事だと伝えることが必要です。その延長線上に性教育があります。また小学生などでも同性同士で脱がしたり触ったりしている子がいますが、プライベートゾーンの話をしていくことも必要です。

保護者や教職員には

白根　保護者に対してLGBTQへの意識を高める上でアプローチする方法はありますか。

遠藤　PTAで企画した講演会に行ったことがあります。しかし関心のある人しか来ない。保健だよりをはじめ学校だよりなどのプリントは多数にわたるからいいかな。制服など今までの制度を変えるときなど、文書を配ることもよい方法だと思います。

尾崎　前例がないことや子どもに不確定な要素を残したまま選択肢を与えることに抵抗感を示す先生がいます。教職員へのとりくみとして上手くいった方法やアイデアなどがありますか。

悩んでいる子がいると考えることから

遠藤　教職員のモチベーションがあがらないのは本当にいるかわからないと思っているからでしょう。第一歩は本当にいると考えることです。まずはクラスに悩んでいる子はいる、すでに出会っている、そしてできることはある、ということを認識することです。

生徒同士でカミングアウトしていることも多いですよ。「うちの学校にはいないよ」と聞いていた学校で講演すると、感想でカミングアウトする子がいます。先生が愕然としている。自分が知らないことを生徒たちがたくさん知っていると。

よく話し合い、いらないものをみつける

修学旅行の時の入浴にかかわって、希望者は一人で入れるとアナウンスすることなどから話し合ってほしい。何回も聞くとそうしてもよいのかなと思ったり、他の学校でやっていると聞くことり入れてもよいかな、と思ったりします。しぶとく話し合っていくことが大切です。

委員会や係活動は変えやすいのではないでしょうか。男女別に決めることが必要なのか、性の多様性の授業だけでなく身近なところから、いらないものをみつけていくことがよいのではないでしょうか。

相談できる環境づくり

横山　性の多様性の理解者でありたいと思うのですが学校で気づくことができるのでしょうか。

遠藤　どの子がLGBTか探す必要はありません。そうかなと思ってもこちらから声をかけません。自分たちのふるまい、会話が異性愛中心になっていないか、学校でいらない行動や仕組みはないか考えていく、減らしていくことが重要です。子どもが打ち明けたり相談したりできる環境を作ることが大切です。保健室や教室に性の多様性にかかわる掲示物を貼ったり、絵本や書籍などを置いたりしておくこともそうした環境づくりにつながります。

相談されたときにどうしたらよいか、自信がないときには専門機関に相談した方がいいですね。自治体やNPO法人などが電話やライン相談をしています。

学校、都教組でできることは

尾崎　教職員で自分の性自認についてオープンにしている人がいると聞きました。

白根　自治体では教職員向けに性の多様性の研修を行っています。

遠藤　カミングアウトしづらい職業の1つが教員と言われています。学校全体で性の多様性を保障する環境づくりが必要です。そして、学校は性の多様性に興味があったり、子どもや教職員のアライ（LGBTを理解し支援する人）になったりする人のハブ的な存在になってほしいと思います。

学校は子どもたちが長く過ごす居場所です。不登校の中に性的マイノリティの子たちもいます。学ぶ権利を保障するために環境を見直していくことが必要です。

組合でできることは、LGBTの人が使える福利厚生についてお知らせを伝い、性の多様性についてそれまで以上に意識するようになり、気づくことが増えました。年に何度かカジュアルウィークという試みをしていて、多くの子がジャージを着てくるようになりました。英検で性別に○をつける欄があり「書かなくちゃダメですか」と聞く生徒に「書かなくてもいいよ」と答えました。朝礼などに男女別で並ぶのも含め、まだまだ慣習にとらわれていることが多いと感じます。

尾崎　以前まめたさんのお話を伺ってから図書室に関係ある本を資料を見るだけでもいいよ、と逃げ道をつくることも必要です。

佐々木　トランスジェンダーなどについて本人から教職員に話ができるような環境づくりで必要なことはありますか。

遠藤　人間関係を築くこと、何気ない会話も含めて近くなることです。「にじーず」ではよくお絵かきしています。子どもたちはいきなり話しません。

尾崎　もやもやしているけれど何が苦しいのかはっきりしていない子で、保健室に一人になりたいと来ていた子が、自然と来なくなることがあると聞きましたが。

遠藤　具体的にこうしてほしい、というのがない子もいます。あるけれど言えない子も。ライン相談は便利ですよ。「にじーず」でも、1年通ったけれど具体的相談はない、それでよいという場合もあります。

「にじーず」で動画をつくったので皆さんに見てほしいです。（15分×4本）いろいろ学べ、学習会や研修にも使えます。

「にじーず」ホームページ動画申込につながるニ次元コード

学び続けること、声をあげていくこと

白根　他の子と変わらず子ども自身を見て関わってあげることが大事だとわかりました。性への関心を抱いている子や同性のプライベートゾーンを触る子への指導も、性教育以前の問題であると気づかされました。相手がどう感じるか、そしてどう信頼関係を築いていくかが大事なんですね。

佐々木　教職員のジェンダーに対する意識を変えることから始めたいと感じました。フラットな子どもを見習って、職場にある異性愛中心主義を見つけ気をつけていきたいです。

横山　大人の意識改革が必要だと感じました。性自認、特別支援、色覚、視覚などで困難を抱える人たちが共に生きやすい環境整備、様々な人権感覚を意識しなければ、と感じました。

高瀬　18歳の若さで何かしなければと「にじーず」を立ち上げた遠藤さんの行動に感動しました。遠藤さんの存在が苦しんでいる人の救いになっているのはもちろん、教職員にとってもありがたい。不用意に誰かを傷つけたり苦しませたりしないための話を聞くことができて良かったです。

尾崎　大事なのは多様に生きる子どもたち一人ひとりを大切にすること、その方法が勘違いや思い込みでなくなるように学び続けること、声をあげていくこと、子どもや教職員に伝えていくことだと感じました。「自分のことを話さない子もいる、一緒に絵を描くだけのこともある」という言葉に力をもらいました。自分のことを傷つけない、安心できる場所・人と思ってもらえることをめざしたいです。

参加組合員　遠藤さん、今日はありがとうございました。